

青年期の対人的交渉方略 (Interpersonal Negotiation Strategy) に関する研究

長 峰 伸 治

I 問題

青年期の対人関係、殊に重要な他者 (significant others) である両親・友人との関係についての知見では、青年は両方の関係において良好な関係の維持をしていながら、初期から後期にかけて関係の質が互惠性や相互性 (Mutuality) を帯びた関係へと変化していくとしている。つまり青年期の対人関係の発達においてこのような関係の相互性を獲得することは重要なテーマである。また青年期は、青年個人の急速な認知発達に伴い社会的コンピテンス (他者とうまくコミュニケーションをとったり、交渉したりする能力) のレパートリーが増大する時期である。そしてこのような能力の増大が重要な他者である友人や親との関係の質の変化にいかにか寄与しているのかを解明することは意味あることである。

近年、社会認知的視点から、青年期という移行期に Critical なこの相互性の獲得のプロセスを解明する研究がなされている。その中の代表的研究者である Selman, R. L. は、重要な他者との文脈の中での社会認知の発達の解明に焦点を当て、それら一連の研究の中で、児童や青年の社会認知の発達を考える上での鍵概念として、“社会的視点の調整能力 (Social Perspective Coordination)” を強調している。社会的視点の調整能力とは、“自己と他者の社会的視点を認知的にも情緒的にも分化させ調整する能力”である。そしてこの能力の発達モデルをもとに Selman ら (1986) は、対人的交渉方略: Interpersonal Negotiation Strategy (以下, INS) という概念モデルを構築している。INS は社会認知の発達に関する2つの側面、社会的情報处理的 (対人的問題解決) プロセスに焦点をあてた機能的 (functional) 側面と Piaget や Kohlberg らによる認知構造の質的 (段階的・発達の) な変化に焦点をあてた構造的 (structural) 側面との統合によって構築されたモデルである。つまり、INS には対人的問題を解決する際の幾つかのステップがあり、それぞれのステップには、未分化で自己中心的なものから互惠的・第三者的なものへと変化していくという順序をもったレベルが設定されている。また INS には対人的不均衡を解決するのに自分の考えを変えるのか他者の意見を変えるのか双方を協調させるのかといった対人的志向もある。

Selman ら (1986) によって INS モデルが提唱された後、INS についてはいくつかの研究がなされている。それらの研究を大別すると、主に児童を対象に INS モデルの妥当性を調べた研究と臨床的実践を含めた臨床研究の二つであり、後者においては、INS が児童や青年の社会的情緒的成長における誤り (非行や不適応など) を記述・診断・治療するための説明力として有用であることが見いだされている。また、上述の青年期の対人関係の発達に限定すれば、INS の基盤となっている“自己と他者との差異を追求し理解したうえで互いの要求を調整する能力”の発達が、青年期の重要な他者との関係の発達のテーマとなる相互性 (Mutuality: 自己と他者の双方の利益や関係維持のためにお互いが共同していく関係) の獲得につながると考えられ、さらには INS は対人的文脈の差異による他者へのかかわり方の違いを明らかにし、いくつかの文脈 (例えば、親子関係と友人関係) を統合して研究するのに有用な概念であると考えられる。INS によるこれらの解明は青年期の対人関係の発達において意味あることだが、INS に関する研究はまだ始まったばかりであり、本邦においては青年に対して行った研究は見られない。

そこで本研究では、本邦で初めて青年を対象に INS の研究を行うこととし、INS 尺度の信頼性と妥当性を検討するとともに、中学生・大学生を対象に青年の対人的交渉方略という社会認知的コンピテンスによって、青年が重要な他者との間で起こる問題をどのように解決していき、また、それらの他者とのようにかかわっているのか (相互的な関係を結んでいるのか) のプロセスに焦点をあてることを主目的とする。また対人的文脈による青年のかかわり方の違いを見るために、重要な他者を同性親友・父親・母親の3タイプにして、INS の年齢差・性差・文脈差の検討を行う。

II 研究1

研究1では、INS 尺度の信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とする。信頼性は再検査信頼性と評定者間信頼性を調べる。妥当性についてはレベルの妥当性と構成概念妥当性を検討する。レベルの妥当性は、各例話の8つの INS 項目毎に0~3のレベルの分布を調べ、年齢が高い大学生の方が中学生に比べて INS の各項目で

高レベルに多くの人数が分布すると推測する。構成概念的妥当性については、Kohlberg の道徳判断の発達または Loevinger の自我発達との関連を調べる。この二つの概念を妥当性の検討に選んだ理由は、INS のモデルと同様、認知発達理論に基づいた概念で一定の順序で質的变化を伴う段階的発達モデルであり、そしてその変化の過程の内容と順序が類似しているからである。INS と他の二つの概念との間には中程度の正の相関があると推測する。

方法：被験者は中学1年生57名 (男26, 女31), 大学1, 2年生60名 (男30, 女30) の計117名。11月上旬から12月中旬に、面接と質問紙による調査を実施。大学生の一部に対しては1ヶ月間隔で再検査を実施した。INS は、1対1の個別面接で被験者に例話を提示し、面接者が8つの基本的な質問と適宜、精査 (Probing) をして測定。例話は、対人的ジレンマが生じる場面で、主人公の交渉の相手となる他者を同性友人、父親、母親の3タイプにして、被験者の実情や研究目的に見合うように予備調査などを基に筆者が作成した。8つの質問の内容は、「問題の定義」「主人公と他者の感情」「代替方略の産出」「最良の方略」「最良の方略後の感情」「解決の障害」「障害後の方略」「結果の評価」である。INS の評定は Selman ら (1989) のマニュアルにある各項目のレベルの基準の概要を参考に筆者が評定基準を追加・変更し、それに基づいて筆者と INS についての説明をうけた大学院生の二名が評定を行った。道徳判断の発達、山岸 (1980) が日本の青年向けに作成した質問紙によって測定。自我発達の測定は佐々木 (1981) が作成した30項目の文章刺激から成る文章完成テストを用い、既成の基準により評定された。これら三つの概念についてはそれぞれ高次のレベルや段階が高得点になるように点数を割りあてて統計的分析を行った。

結果と考察：平均した直接一致率は、再検査信頼性は66%、評定者間信頼性70%となり INS 尺度の信頼性が検証された。レベルの妥当性に関してはほとんどの項目において大学生の方が中学生に比べて高レベルに多くの人数の分布が示された。構成概念妥当性については、INS 各項目のレベルと道徳判断発達のステージとの相関は $-0.09 \sim .29$ 、自我発達のステージとの相関は $.03 \sim .28$ と予測したような中程度の正の相関はみられなかった。このように理論的には類似している概念が統計的には関連がないという結果になったのは、各概念の測定方法やスコアリング方法が異なるゆえに得られる反応の質が変わったからではないかと考える。また、この結果から、これら三つの概念は共に認知発達に基づいた段階的モデルであるが、INS は特定の対人的文脈の中での問題解

決能力あるいはかかわりの持ち方であり、他の二つの概念とは違って、文脈に依存した概念であるとみることもできる。

III 研究2

研究2では研究1で検討された INS 尺度を使って青年の対人的交渉方略に関して、年令差、性差、文脈差の分析が目的である。先行研究や青年の対人関係についての過去の知見をもとに仮説を立てると、年令差については特に親との関係において中学生に比べて大学生の方が、性差については男子に比べて女子の方が、文脈差については対親に比べて対友人の方が、それぞれ INS のレベルが高い (より互恵的・相互的) であると推測する。

方法：被験者と INS の測定の手続きは研究1と同様である。

結果と考察：年令×性×文脈の分散分析と INS の各項目のレベルや対人志向の分布の結果から以下のことが示された。まず年令差に関しては、両親との場面においては大学生の方が最良の方略がより互恵的・相互的であることが証明された。一方親友との場面では最良の方略は年齢による有意な差はみられず、親友との関係では青年期初期に既に相互的であると考えられるが、レベルの分布をみると中学生は対人的交渉方略のレベルにおいて、個人差が大きいことがわかった。代替方略については数においては年令による有意差はみられず、平均レベルが大学生の方が有意に高かったことから、代替方略は数ではなく平均レベル (質) において年令による差がみられることがわかった。性による主効果はみられなかったが、最良の方略のレベルと対人志向の組み合わせの分布を見ると特に母親場面で同レベルであっても男子は他者変化的・主張的であり、女子は自己変化的・譲歩的である傾向がみられた。また、ほとんどの INS 項目について文脈による主効果がみられ、そのどれもが対友人の方が対親に比べて INS のレベル得点が高い、つまり互恵的・相互的であることが示された。対人志向に関しては、自己変化的志向が一番多かったのは父親場面で次に母親場面で多く、対親の方が対友人に比べて自己変化が多いことが実証された。これら統計的分析のほかに例話別に個々の反応についての質的分析も行った。そこで明らかになったことは、被験者が語る方略が一見同じ内容である場合でもその理由付けにおいては個人・年令・性によってかなり意味合いが違うこと、また、それらの理由付けには被験者の実際の対人関係、およびそれらの関係の中で蓄積されていると思われるような特定の他者に対する信念やイメージが強く反映しており、これらのことを INS の個人差を生む要因として今後更に検討していく必要性が示された。